



羅針盤

清水 晶
Akira Shimizu

金沢医科大学皮膚科学教室 教授



ウイルスと皮膚疾患

今回の特集では、幅広くウイルス性皮膚疾患を取り上げた。通常みられるウイルス性疾患の診療で役立つ情報、ウイルス検出の方法、ウイルス関連の希少疾患、ウイルス発見の舞台裏などである。執筆はウイルス関連疾患の専門家、もしくはウイルス性疾患に一家言ある先生方をお願いした。

前半は臨床ですぐに役立つような実用的なテーマとした。まずは新型コロナウイルス関連の皮疹をピックアップした。新型コロナウイルスに関連する皮疹、そしてワクチンに関連する皮疹に関しては国内外で多くの論文がある。皮疹の病理やウイルスタンパク質、核酸の皮膚における発現部位、免疫応答などの知見も得られており、感染制御はもちろん重要であるが、皮膚科医としては、これまで不明であったウイルス性発疹症の理解が進むことを期待している。続いて日常診療で治療にてこずる疾患を中心に上げた。非典型的な帯状疱疹、単純疱疹、難治性疣贅など悩ましいウイルス性疾患は多く、エキスパートによるアドバイスをふんだんに盛り込んだ。最近話題の帯状疱疹ワクチンおよびHPVワクチンについても専門の先生方に解説いただいた。とくに帯状疱疹ワクチンは今後需要が高まると思われ、基本的な知識をこの機会に習得できると思う。

後半は、稀少ではあるがウイルス性疾患を考えるうえで重要なウイルスとその周辺事項を特集した。筆者は以

前から、ウイルスハンティングのような大げさなものではないが、ウイルス感染様の皮疹を呈する自己免疫疾患などの「ウイルス感染が発症に関与するかもしれない疾患」に興味があった。また、今回も特集にも含まれるHPV関連爪部Bowen病と性感染症のように、ウイルス性疾患の社会的な意味も考えたい。後半部分は筆者の個人的な思いを反映した内容となったことをお許し願いたい。

臨床的なウイルス研究の面白いところは、疾患を原因から考えられることである。さまざまな遺伝的素因や環境因子が絡み合い疾患は形成されるのであろうが、ウイルス感染という明確なトリガーを設定するということは、源流を目指して川をさかのぼるような知的好奇心を駆り立ててくれる。また、本当にウイルスが原因であれば、抗ウイルス薬という根本的な治療法開発の可能性もみえてくるだろう。

読者の皆様には、忙しい診療の合間に本書を手に取り、皮膚科領域で話題になっているウイルス性疾患を眺めていただきたい。日々よく出会ういぼなどは、ウイルスの存在を意識しなくても治療可能である。しかし、原因ウイルスに思いを巡らせることで、common disease診療もさらに充実した興味深いものになるかと思う。最後に編集部にご執筆いただいた先生方に心より感謝申し上げます。